

杉本博司と床のしつらえ

「一昔前まで、日本の住居には床の間という特別な空間がございました。そこにはなにか神聖な気が流れておりまして、花がいけられ、軸が掛けられておりました。あれは戦後の高度成長のころでしたでしょうか、三種の神器の一つなどと言われていたテレビが、しだいに床の間に闖入いたしまして、床の間の神聖は穢されてしまったのでございます。そうこうするうちに床の間そのものが、石もて追われるがごとく、日本人の生活から姿を消そうとしております。」

「床の間から、季節とその心が消え失せる時、その時は日本文化が減じる時と、私は心得ております。」

杉本博司

若い方々にはあまり馴染みがないかもしれませんが、かつて日本家屋では、客間の一角に床の間がもうけられていました。そこに掛け軸をかけ、生花や置物などをとりあわせて楽しむ習慣が、一般庶民のあいだにも普及していました。床の間は、単に美術品を飾るだけの場ではなく、季節を愛でること、客をもてなすことと分かち難く結びついています。杉本は、このような床の間を日本文化の重要な核と考え、それに並々ならぬ情熱を注いできました。

近年、茶会や展覧会などの折に、杉本は自らの蒐集品から軸と置物を選び、その催しにふさわしい床のしつらえを披露してきました。2005年、森美術館で開かれた「杉本博司 時間の終わり」展にあわせ、根津美術館庭園内茶室で三夕の和歌に仮託した三つの茶席を設えたときには、それぞれの和歌にあわせた床飾りをつくりました。また2009年、大原美術館有隣荘の「今児島 アート 建築 拾遺」展で、古びた落石注意の看板と、それを谷底に落としたと思われる石を組み合わせた、斬新なしつらえを展示しています。2011年には、ニューヨークに自らの茶室「今冥土」を開き、以来、茶会のたびにさまざまな床飾りでゲストを迎えてきました。

杉本は、2013年秋より、『婦人画報』誌上で「謎の割烹 味占郷」を連載してきました。この連載は、毎回「味占郷」という架空の割烹に文化人や芸能人を招待し、その人物や季節にあったしつらえと料理でおもてなしするという企画です。ゲスト、床のしつらえ、料理が三位一体となったこの連載は、本年12月号で最終回を迎えます。展覧会「趣味と芸術―味占郷」では、そこで紹介された床のしつらえを杉本の手により再構成するとともに、料理を盛った器の一部もあわせて展示します。